

柴内 裕子氏 (公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問)

Hiroko SHIBANAI, Consultant, JAHA (Japanese Animal Hospital Association)

○柴内先生

先ほどまでにAAA、AAT、今度はAAEということになります。私、動物介在教育、主に小学校が対象ですけれども、最近、大変望まれました多忙を極めているわけですけれども、素晴らしいボランティアと、それから素晴らしい動物たちのおかげで、現在までJAHAの活動の中では事故もなくまいっております。

動物介在教育、ほとんどが学校の授業の中に取り入れていただいているわけですけれども、学校というところは大変忙しいところで、新しいプログラムとか新しい行事を持ち込まれますと、先生方は大変お嫌いになります、一般論的に。ましてや動物を連れてなどということになると一層、何か起こるのではないかと。ましてや、このごろは何とかペアレントといまして、何かがあればすぐねじ込まれてしまっていて先生方が御苦労なさるということで、とても第一歩を踏み出すところは大変難しかったんですが、これを勇気ある学校が初めて迎えてくださいますから、もう相当な年月がたちます。

多くの場合が、この活動をごらんになった校長先生が校長会で発表なさると、うちも来てくださいますとか。それから、そのときに担任でおられた先生が他校へ転勤した先で、うちに来てくださいますということからどんどん広がっているというふうなことが一般的です。

これは、真ん中は、練馬区の第8小学校の校舎かと思えます。多くの場合、左側にあります体育館で行われることが多いですね。

今、JAHAのお話は、CAPP委員長の戸塚先生からお話し申し上げましたけれども、動物を介在させる学校での教育ということについては、今回レベッカ先生がIOHAI Oの会長になられましたけど、私は今回、IOHAI Oの会長に人間側の専門家がなられたということが、これは本当に素晴らしいことだと思ってるんですね。人と動物のかかわりは、最終的には人間が無事に逝くために動物を大切にしていこうということですから、人間の健康とか、それから福祉とか教育に、動物がたくさん役に立ってくれるということをお互いに認め合って、互いに幸せな地球をつくっていくための目的ですから、今までは主に、どちらかとい

うと、きょうここに横山先生も見えてますけど、人の医療の関係の方が少なかったんですね。でも、ここでIOHAI Oの会長にレベッカ先生がなられたこの機会に、来年はシカゴで大会がありますから、日本からぜひたくさん参加して、きょうお出かけいただいたレベッカ先生を一層力づけるために参加したいと、こういうふうに思いますので、よろしく願いいたします。

ちょっと脱線しましたが、教育の場面に動物を入れるということは、IOHAI Oのリオの大会ではっきりとうたわれています。リオの宣言です。あくまでも子供たちにとって安全で衛生的であるという意味から、親のいる動物ということをはっきりうたっています。ということは、親がいるということは、すべての責任を持った動物だということだと思います。そういうことになると、学校飼育動物は本当に親がいるんだろうかといったようなことまで心配してしまうんですけど、そこに言及することは問題がありますので、ここでは控えておきますが、こうした飼い主が本当に健康で、子供たちが大好きな動物たちを連れていくことによって、動物介在教育は目的を達することができる、というふうに思います。

きょうはこのスライドはもうあと1枚で終わります。小学校でのビデオを見ていただくことにします。そして、この動物介在教育が一番右端ですけれども、アニマルセラピーという言葉は日本では大変にわかりやすいような、耳ざわりのいい言葉になっていますけれども、実はJAHAがもう26年前からCAPP活動を始めましてから、さまざまなメディアが取り上げてくださるたびに、わかりやすいということでアニマルセラピーという言葉が使われています。しかし、これ



は世界的には通用する言葉ではない。動物を治療するためにもアニマルセラピーという言葉が使われたことがありますので、かならず実践の現場、この三つに今、発表にも三つ目が、動物介在教育、一つ前が動物介在療法、その前のきしろ荘さんが動物介在活動ということで、はっきり現場は三つに分けられています。そういう意味で、きょうは動物介在教育ですけれども、どの場面であっても事故は許されません。ですから、それなりの準備というものを徹底していかなければならないわけで、私たちCAPPも、当初から事故に対しての危機管理というものに非常に重点を置いています。うちの子はいい子だから、小学校へ行こうとか幼稚園に行行って触れ合いをさせてあげようということで、もしも何かが起こったときは、その方は本当に大きなものを背負ってしまうこととなります。そういう意味でも、危機管理をしっかりとした形で活動を進めなくてはいけないと、こういうふうに思っております。

動物介在教育の一例をきょうは見させていただきますけれども、これはなかなか、小学校はもう写真を撮ったりビデオを撮るといことはほとんど許されません、まだまだ。大変残念なんですけども、きっとこれからは私立学校などですと、きちっとお話をすると許可が出てくるようになってくるとは思いますけれども、写真1枚撮りましても、それはどこに出すのか、改めて家族の方、そして先生の許可をもらわないと、ほかに転用することも許されないのが日本の現状です。

ある中学校に伺いましたら、廊下にすばらしいお子さんたちの絵があったんですね。一緒に同行しましたカメラの方が、その写真をちょっと撮ろうと思ったら、待ってください、名前がついてるものは撮らないでくださいとおっしゃるぐらいに、なかなか厳しい面がありまして撮らせていただいけません、きょう見いただきますビデオは、東京の板橋にあります赤塚小学校の父親の会。お父さんたちが日ごろ子供たちと接することが少ないので、お父さんたちがグループをつくって、子供たちのために楽しい時間をつくろうということで、日曜日から土曜日にお父さん主催のいろいろな催し物がありまして、その中に動物介在教育をお迎えくださったときの一場面、お父様方の許可がありまして見ていただけるものです。もう数年前のものですから、さまざまな部分がありますけれども、そのことはおわかりいただきまして見ていただきます。

それから、小学校の場合は、このように校長会などでうちの学校にも来てくださいますとおっしゃられたときには、協会またはチームの責任者が学校側に出向きま

して、そして覚書の交換、これはどの活動でもそうですけど、最終責任者と協会の最終責任者の覚書を交換して、例えば事故のあったときにはどのようにするかといったような、さまざまな約束事をします。そしてまた、プログラムの前には学年であるとか児童数であるとか、それからその地域の環境はどんなところのお子さんが多いのかとか、それからどんな動物と暮らしているかといった事前のアンケートをとります。それによってプログラムをつくっていくわけですが、終わってから1カ月後にもまたアンケートをお願いして、どのような変化があったか、どのような問題があったかといったことなどをお願いするようにしています。

何はともあれ、先生方の御協力がとても大事ですが、私が、ちょっと言葉は正しくないかもしれませんが、学校側は面倒なことは大変困るんです。でも、この団体のこの活動は信頼がおけるといことで迎えてくださるわけですけれども、例えば準備にいろいろなことがあるということになると、担任の先生は大変負担になってしまうんですね。出前法と私は頭の中で思ってるんですけど、全部準備をしていきまして、時間と生徒さんと先生をお借りして、全部後片づけしてさっと持って帰る。先生方もそんなに大変じゃなかったという気持ちを残していただくことで、また次の御依頼が出てくるというふうに思います。

よく、ある小学校では、父兄参観の日に小学校1年生を担当した先生が、そのクラスの中に多動症のお子さんが3人いて、そして、もう先生が登校拒否をされてしまったんですね。生徒さんを着席させることも難しい。ましてや算数や国語を教えることはできない。そのような騒然たるクラスに困ってしまって、先生が学校を登校拒否なさった。そのときに父兄参観が来た。そして、私たちは呼ばれました。何回かお訪ねしたところですけど。そのときに、確かにクラスに伺いましたら、走り回ってるお子さんが3名おられたんですけど、多動症のお子さんがいらっしゃるんだと思ってましたが、活動中は何にもわからなかったです。終わりましたら校長先生がおいでになって、反省会のときに、毎日来てくれないかと、こうおっしゃったんですけど、それは一つの例で、確かにサミュエルロス先生、グリーンチムニーズの先生方の発表に、多動症のお子さんに動物はとても大切だという発表もありますので、それが何もかもこういうことということではありませんけれども、動物たちはそれだけ子供たちの心を引きつけ、そして心の安定を図るのにも大きく役立ってくれてるんだと、こういうふうに思いました。

それでは、ビデオのほうに入りますのでよろしくお願ひします。

お子さんたちは、よいことも悪いこともとても簡単に伝染します。最近はお散歩のコースで、わんちゃんを散歩している方は、子供たちがさわってもいいですかと優しいぐーを出してくれるようになったとおっしゃってます。そういうことが、つい最近銀行に行きましたときに、私が連れているキャリーの中の犬を見て、犬、さわってもいいですかと、こういうふうに出された奥様がおられた。やっぱりよいことはたくさん伝えていかなくはいけないなと最近つくづく思います。

うれしそうなお父さんですね。お父さんがうれしそうにしてらっしゃる。

それで、つい3日、2日前でしたでしょうか、活動に伺ったところは、1年生が23名の予定だったんですけど、インフルエンザで5人欠席というところでした。とても寒い、小学校で一番気をつけなくてはならないことは、冬期の活動はとても寒いということです。暖房のない体育館というのは大変な温度になりまして、お子さんたちは割と元気なんですけど、ボランティアの私たちは大変寒い思いをします。

(ビデオ上映)

○柴内先生

ありがとうございました。

これはお父様の会なので、1年生から6年生までいる合同のあれなのでプログラムが大変難しく、小さいお子さんにターゲットも、上級生にもというふうに決めることができなくていたしました。そういうときは、上級生のお子さんに手伝ってあげてねというふうな形でお願いをします。

それから、あとは御質問を聞いていただきましょうか。

○戸塚座長

どうもありがとうございました。

ただいまの御発表につきまして、質問がございましたら、どうぞお願いいたします。

○質問者

ありがとうございます。

今見させていただいたんですけど、確かに教育関係というのはすごく敷居が高いと思うんですけど、初めの1校が受け入れてくださったきっかけとか、先生の判断とか、あといろんな事情というのをちょっとお聞かせいただけたらと思うんですけど。

○柴内先生

私の記憶では、J A H Aの……スタートさせたとき

は26年前なんですけど、高齢者施設からのお声が最初にかかりましたのが、厚生省から認可をいただく前に、厚生省がJ A H Aはこういう活動をすると言ってますよということを新聞に載せていただいたことで、その新聞を見て、26年前に横浜のさくら苑という施設からお声がかかって、さくら苑、高齢者施設で始めて、隣のあさひ苑が始まってというふうに広がったわけですが、私の記憶では23年前に新潟の長岡市で青年会議所の方が、J A H Aのメンバーもそこにおられたんですけど、少年会議所とあわせて、小学校で子供たちに動物との正しい触れ合い方を教えてくれませんかとおっしゃられたのが最初だったと思います。それで、私、地元のチームの方、そのころハスキーなんか結構多かったんですけど、大型犬が主軸で、私も自分のパートナーを連れて長岡に行きまして、大講堂でお子さまと御父兄と200人ぐらいのステージの上でモデルをお見せして、下で活動した覚えがあります。

そこから始まりましたけど、東京での活動が始まったのは、J A H Aの事務局長をしておられた内山さんという方がおられますが、その内山さんのクラスメイトが練馬の第8小学校の先生だったんです。それで、そういうことがとてもよいことだと聞いてるから来てもらえないかとおっしゃってくださったことが始まりなんです。ですから、東京の活動は、その第8から始まりまして、練馬区、それから豊島区、あのあたりは非常に集合住宅が多いんですね。光が丘団地とか高島平とか巨大な集合住宅が多くて、そういうところの先生方はやっぱり一緒に動物と暮らせない子が多いということがあって、飛び火的に周辺に広がって、赤塚も練馬区でした。たしか豊島区か練馬区なので、やはり近いところなんです。特に動物と生活ができるお子さんが少ないということから、校長会議とか先生方の転勤先でのお声がかかりがって、最近では多発してきております。やはりいい情報が流れる。それから、見学に来てくださった御父兄の方たちが、やはり口コミというんですか、伝達でお声がかかっていることがほとんどです。

○戸塚座長

そのほかに。

○質問者

教えていただければと思います。動物介在教育とヒューメインエデュケーション人道教育とは、どのあたりが違うんでしょうか。というのは、私はヒューメインエデュケーションのほうにすごく興味があるもので、きょう来たわけなんですけれども。

○柴内先生

ヒューメインエデュケーションというのを今なさってらっしゃいますか。

○質問者

これからオンラインで、アメリカのほうから資格を取ってやらせていただけたらなど。文科省のウェブサイトとかを見ましたら、去年から新規でカリキュラムに入ってるということで、ぜひ参加させていただければと思ってるんですが。

○柴内先生

そちらのほうは直接は存じませんが、最近では日本でも何カ所かでそういうエデュケーションと、それからこちらとの関係ですね、御説明などがたくさんありますけど。人間的であれというね。あらゆる生物に人間的であれというその態度が、ヒューメインエデュケーションということだと思います。

それから、これは動物を介在させた直接的な教育なんですね。ですから、大もとは、あらゆる生物に対して人間的であれということ、私たちのすべての活動のもとにもなると思います。私はそういう心がけております。よろしいでしょうか。

○戸塚座長

それじゃあ、お願いします。

○質問者

三つの活動、それぞれ内容が違うと思うんですけど、動物の基準も違うんですか。

○柴内先生

とても大事な御質問だと思います。

J A H A の活動の、この C A P P の基本は、アメリカのデルタ協会という協会があります。環境と人と動物というデルタのマークで御存じかと思えますけど、その協会が、先ほど先生がデルタの試験をお受けになったと言うんですけど、デルタの場合は活動の基準をつくられた、世界最大の素晴らしい基準をつくられた。その基準をつくるためには、もうあらゆる学問分野の人たちが集まって、大変な長い年月と大変な投資をして基本をつくってらっしゃるんですね。その基本は、世界で共通に活用させていただいていいと私は思っています。J A H A もそのデルタの基準を基本として活動してますので、世界の活動の基準に合わせようという目的でしていますが、現場は日本ですから、少しずつ違うところはあると思います。

それから、デルタの場合は、その試験の資格を取った方たちは、そのパートナー、ペットと2人でパートナーになって単独行動が主になされるようになってるんで

すね。その中でも動物介在活動と動物介在療法をまず比較したときに、多くの人たちが動物介在療法というのは医療だと。人間の治療をするために動物を介在させている医療だから、高齢者施設にお訪ねするレクリエーション的な意味の動物介在活動より高い水準のもので、大変難しいものではないかとお考えになる方があるんですけども、私はそうではなくて、動物介在活動、先ほどきしろ荘でなさってたような、その活動こそが一番基準なんですね。なぜかという、そこに行くボランティアさんの方というのは、とてもよくお褒めをいただくんですけども、昨晚、レベッカ先生も、ボランティアさんが素晴らしいとおっしゃってたんですが、動物たちが素晴らしいというのは飼い主さんが素晴らしいんですね。それで動物介在活動は、現場は、一人一人が一人一人のお年寄りと対応するんですね。そういう意味で言いますと、その方の持っている資質が、本当にその現場で大きく活用されているんです。ですから、動物介在活動を立派にできる方は、ほかの活動ができるはずなんですね。そういうことをまず申し上げておいた上で、動物介在活動と動物介在療法の現場を務める動物側、それから飼い主側の基準の違いのいささかだけを申し上げておきたいと思うんですね。

それは、一般的な動物介在活動の現場は、先ほども戸塚先生がおっしゃいましたけど、年に1回の健康診断、それと行動学的なテスト、そしてまた、J A H A の基準に合ってるどうかといった基準の基本になるような試験はありますが、チェックはされますけれども、動物介在療法の現場は、きょうはありませんでしたが、小児科病棟にはたくさん入っています。この小児科病棟の場合ですと、ほとんどが白血病ですね。小児がん、血液の腫瘍の病棟に入ることが多いんです。そういうところからのお招きが今のところ多いものですから、そうしますと、白血球数が下がってるようなお子さんたちに接触するということは、医師側も私たち参加するほうも、大変基準が高くなります。年間2回の健康診断、6カ月ごとですね。それと同時に、もちろん行動学的なチェックもします。さらに口腔内細菌、それから腸内細菌のチェックも6カ月ごとに行っています。それが義務づけられますし、簡単に申し上げると、室内飼いの動物、室内飼いのほとんど犬ですね、限定されたほとんどが。ですから、表でもし暮らしてたとすると、前の日におふろに入れることが基準になってますから、前日におふろに入れても外に置いといたら何が見つかわかりませんので、そういうことも含めて室内飼いということを経験しています。そういう

ことで、すべての予防接種とかそういったことはA A Aの場と同じです。腸内細菌、口腔内細菌は6カ月ごと、健康診断も6カ月ごとというところが基準としては違います。

それから、小児病棟とか、子供さんたちと接触するA A Eの場面では、絶対に事故は許されません。もちろん大人の場合でもそうですが、子供たちの行動は突発的な行動がありますから、そういう意味でも万全を期した、子供が大好きな子が行きますね。その辺で大丈夫ですか。

○戸塚座長

そのほかに質問ございませんか。

それでは、アドバイザーの先生から一言お願いいたします。

○レベッカ・ジョンソン

おめでとうございます、柴内先生。素晴らしい活動だと思いますよ。

子供たちは、大事な点を学んでいच्छゃると思います。子供にとっては大事な点ですよ。犬にどのように接するか、そしてどのように反応するか、これは大事だと思います。コメントとしては、先ほどの質問ですが、非常に大事な点だと思います。基準であります、人と基準、そしてペットオーナーとしての基準も大事だと思います。こういった情報を子供たちに教えるときに、十分にペットオーナーも注意しなければいけません。彼らが身体的に強靱化、あるいは制限がないかということです。時として、子供が死んでいくのを見たくない、私もそうですけれども、という人もいますよね。私は高齢者がいつも対象ですので、子供が死ぬのを見たくないんです。犬のオーナーとしても、この点を十分に注意しなければいけません。ですので、心はどんな状態なのか、精神的状態も大事ですよ。こういった活動が犬にも彼らにも、ペットオーナーにもプラスになっているかということです。

犬は十分に訓練されていてすばらしくても、子供に余り反応しないかもしれません。多動症の子供は突然動きますし、訓練が十分にされていても、このような犬というのは多動症の子供の前に出すべきではないですね。ですから、ペットオーナーとしても、こういった制限があるということを知っておかなければいけません。犬にも限りがあるんです。制限があるんです。ですから、双方にとってどんな活動がプラスになるかということに注意しなければいけません。ペットオーナーも、そして犬もハッピーになってもらいたいと思います。もちろん、だれにも有害なことがあってはならぬ

というふうに考えます。

○戸塚座長

ありがとうございました。

それでは、私のほうから一言コメントさせていただきます。

先ほど質問された方もありましたけれども、やはり動物のほうも同じ基準で選ぶですけれども、高齢者のようにゆったりした活動を好む動物、犬・猫もいますし、子供たちのように活発な活動を好む子もいますので、それは飼い主が犬の適正というものを見て、どちらにも向いてる子もあるだろうし、こちらのほうがいいよという子もいるだろうし、その辺は見て、活動に参加するのがいいんじゃないかなと思いますね。

それから、J A H AのC A P P委員会では、今までA A A、A A Tというものを中心に行ってきたわけですけれども、柴内先生のお話にもありましたように、A A Eにも十分力を注いで、これから委員会としては、皆さんのA A Eをやりたいよという声にこたえていきたいと思っています。

そして、ビデオでは、手づくりのいろんな道具が出てまいりましたが、今、きれいなものをセットとしてつくっております、全国のチームから依頼がありましたら貸し出しができるように今、準備しております。ですから、私たちのチームもA A Eやってないけれども、これから始めたいというチームがございましたら、ぜひ事務局のほうへ声をかけていただきたいと思います。

以上、コメントです。

○柴内先生

今、先生がおっしゃったのは、変な車と垣根のあれですね。あれをきれいなものに変えましたので、ぜひ、また御希望のところは手を挙げてください。よろしくお祈りします。

○戸塚座長

以上で、ワークショップⅡ「人と動物の絆 Human Animal Bond タイガープレイスと日本における代表的なアニマルセラピーの活動発表」を終了いたします。

また、受付で寄附の御協力をお願いしておりますので、どうぞよろしくお祈りいたします。

それでは、長時間にわたりまして御清聴いただきありがとうございました。